

いうことについて見るとき、中国仏教では必ずしも阿弥陀仏が報身であるとはされていないことを知っておかなければならない。淨影寺の慧遠、天台智者大師、嘉祥寺の吉蔵などは阿弥陀仏を報身ではなく応身と見ていた。⁶⁾これらの説に対して道綽、善導は阿弥陀仏が報身であることを明らかにした。⁷⁾法然はこの善導の説を継承している。しかしつぎの報身の弥陀を真実身とすることは善導等の諸師には見られない法然のユニークな宗教思想である。思うにこれは報身の弥陀これが真実の宗教的實在だと法然が信じていたからであろう。この報身は法身、応身の及ばぬ完全な仏身である。阿弥陀仏は本願力によって一切の衆生を攝取するという仏の大慈悲が最もよく現われた人格身である。法身は無相無辺永遠なる理身仏である。理知の対象とはなるが暖かに宗教的感情の対象とはならない。他方応身は具体的な人間性を感じる仏身ではあるが、永遠性がなく、絶対帰依の対象とはならない。これらに対して報身の弥陀は法蔵菩薩が因位の修行をして後、仏となったものであり、一切衆生を救わんとする大慈悲をもった仏であると示されている如く、豊かな仏教的人間味が表われている。と同時に、その成仏によって無量寿無量光という時空の限界を超えた無量性永遠性をも内に秘めた仏である。阿弥陀仏はかくの如く永遠性と人間性を内撰した人格身である。かくして阿弥陀仏は、法身応身とは異なり、しかも両者の功德を内に秘めた三身即一、諸仏統攝の人格性を具えた宗教的實在であると法然は感得されたものと思われる。

註1

二身説には、①生身・法身（「仏地論」七）②父母生身・法性身（「大智度論」九）③真仏、非真仏（「般若論」）④法身・解脫身（「解深密經」「瑜伽論」）。三井昌史「仏教哲学思想大系」六七頁。「大智度論」第三十には真身・化身の説がある。

2 「淨土宗略要文」には「善導和尚意、云釈尊出世本意、唯説念仏往生之文」として「法事讚」の文があげてある。（昭法全、三九八頁）

3 「無量寿経釈」などに引用されている。（昭法全、六七頁）

4 「選択集」第三章（昭法全、三一九頁）、「無量寿経釈」（同、七一、七六頁）、「往生要集註要」（同、五頁）、「逆修説法」（同、二五五頁）

「往生淨土用心」（同、五五七頁）、「澄円上人伝聞の御詞」（同、七七〇頁）

5 觀經疏散善義（深心釈）には次の文がある。

十方諸仏悉皆同讚同勸同証、何以故同体大悲故、一仏所化即是一切仏化、一切仏化即是一仏所化。（淨全二ノ五八頁）

十方仏等恐畏衆生不信釈迦一仏所説即共同心同時各出舌相遍覆三千世界説誠実言。（同）

6 慧遠「無量集経義疏」（淨全五ノ三頁）、「觀無量寿経疏」（同、一七一頁）、天台「觀無量寿仏経疏」（同、二〇四頁）、吉蔵「觀無量寿経蔵疏」（同、三二八頁）。大原性実「善導教学の研究」（永田文昌堂）、二

五四頁以下参照。

7 道綽「安樂集」（淨全、一ノ六七六頁）、善導「觀經疏」玄義分（淨全二ノ一〇頁）。

仏有^二惣別二功德、先惣者、四智三身等功德也。一切諸仏内證等具一仏無^レ異。(同、二五五頁)

とあり、「阿弥陀経釈」にも、釈尊を仏というについて「三身万徳之釈尊」(同、一三三頁)としている。阿弥陀仏も修因感果された仏である故、このような内證の功德を具備しているのは当然である。先に「無量寿部釈」の三身説をあげたが、実はこれも三身の一応の説明であって、これは修因感果された阿弥陀仏に具っている功德として説かれているものである。即ちこれは阿弥陀仏の因行果徳を説くもので、「因行の中には多く六度を誓い、果徳の中には多く三身を撰す」(同、七八頁)とし、その果徳として説かれている三身である。このように修因感果の仏身に三身の徳が備っているのであり、これが真実なる所以でもある。かくして法然によれば、阿弥陀仏は報身ではあるが、単なる三身の中の一身ではなく、三身即一の仏身である。このような三身即一の思想は他の語録にも見られる。⁽⁴⁾

② 先に弥陀と諸仏との関係を見たのであるが、そこで明らかに⁽⁵⁾なったことは、釈迦は弥陀の本願念仏を一切衆生救済のための唯一絶対の教えとして説示し、このことの真実なることを諸仏が証誠されたということであった。しかしこのことをさらに詮じつめれば、弥陀本願の念仏の教は、ひとり阿弥陀仏の御意であるというだけではなく、一切諸仏に共通した御意であるということになる。「選釈集」第十六章には「然則釈迦弥陀及十方各恒沙等諸仏同心選^二択念仏一行。余行不^レ尔。」(同、二四七頁)と示され、「浄土宗略抄」には、

弥陀、釈迦、諸仏をあげた後、

かくのごとく一切諸仏も残らず、同心に一切凡夫念仏して、決定して往生すべき旨を勧め給へる上には、いつれの仏の又往生せずとはの給ふべきそといふことはりを以て、仏来たりて宣ふとも驚くへからずとは申す也。(同、五九八頁)

と示し、「御消息」にも同趣のことがつぎの如く語られている。

如是一切の諸仏、一仏も残らず同心に、一切の凡夫、念仏して決定して往生すべき旨を、或は願を建て、或はその願を説き、或はその説を證して、勧め給へる上には、いかなる仏の又来て往生すへからずとはの給ふべきそと云理りの候そかし。(同、五八二頁)

かくの如く念仏は阿弥陀一仏のみならず、一切衆生の救済という一切諸仏の本心であり、その意味で念仏は仏性の顕現であると理解される。弥陀、釈迦、諸仏はそれぞれの役割をもっているが、この三仏に共通する本質を追究していったとき、そこに顕れてきたのが念仏の教えである。しかも念仏が出て来る根拠が阿弥陀仏の本願にあるのである。かくして法然は阿弥陀一仏の中に一切諸仏が統攝されうると考えたのである。こうしたことから阿弥陀一仏を帰依の対象とされたのである。このことは決して他の諸仏を否定するものではない。

③ 阿弥陀仏は修因感果の報身であり、さらにこれが真実身であると法然は了解した。これには二つの重要な要素が含まれている。第一は阿弥陀仏が報身であるということ、第二はこの報身が真実の宗教的実在であるということである。まず阿弥陀仏が報身であると

陀仏の本願の集約された念仏そのものを明かすことに集中しているためであって、法蔵菩薩の願成就の修行として六波羅密は当然のこととして、これを省略したものと思われる。

第三は「無量寿経」所説の阿弥陀仏の因縁である。これは「選択集」その他に見える。まず「選択集」に「無量寿経」の文がそのまま引用されている。

仏告阿難。乃往過去久遠無量不可思議無央數劫、錠光如来、興出於世、教化度脱無量衆生、皆令得道乃取滅度。次有如来一名曰光遠。乃至次名處世。如此諸仏^{五十三}皆悉已過。尔時次有仏、名世自在王如来。時有國王。聞仏説法。心懷悦豫、尋発無上、正真道意、棄国捐王行作沙門、号曰法蔵。高才勇哲、與世超異。詣世自在王如来所、乃至於是世自在王仏即為広説二百一十億、諸仏刹土人天之善惡国土之麤妙、応其心願悉現與之。時彼比丘聞仏所説嚴淨国土、皆悉觀見、超発無上殊勝之願。其心寂靜志無所著、一切世間無能及者。具足五劫思惟撰取莊嚴仏国清淨之行。「選択集」第三章、昭法全、三二七頁)

説彌陀如来因位願謂、乃往過去久遠無量無數劫有仏、申世自在王仏。其時有二一人国王。聞仏説法、発無上道心、捨国棄王、出家成沙門、名曰法蔵比丘。即詣世自在王仏所、右遶三匝、長跪合掌、奉讚仏白言、我設淨土欲度衆生。願為我説経法。尔時世自在王仏為法蔵比丘、説二百一十億諸仏淨土、入天善惡、国土麤妙、又現之與給。法蔵菩薩聞仏所説、又見嚴淨之国土已後、五劫間思惟取捨、從二百一十億淨土中、撰取、

而設四十八誓願給。「逆修説法」三七は、同、二五二頁) 双卷経二ハ、先阿弥陀仏ノ四十八願ヲ説キ、次三願ノ成就ヲ明セリ。其四十八願ト云ハ、法蔵比丘、世自在王仏ノ御所ニシテ、菩提心ヲ発シテ、淨仏国土成就衆生ノ願ヲ立給ヘリ。

(「三部経大意」、同、二七頁)

この他にも「浄土宗略抄」(同、五九二頁)「禅勝房に示されける御詞」(同、六九六頁)、「念仏往生要義抄」(同、六八四頁)、「七ヶ条の起請文」(同、八一頁)、「四箇条問答」(同、七〇二頁)、「往生浄土用心」(同、五五七頁)なども見える。これらによれば阿弥陀仏とは一国王法蔵が出家して菩薩となり、世自在王如来のみもとで殊勝の願を建て、五劫の間、莊嚴仏土の行を思惟撰取して、六波羅密を行じ願成就して仏となられた、修因感果の仏身である。そしてそこには人間が菩薩行を修行して仏と成るといふ大乘仏教本来のあり方が説かれているのである。この点はキリスト教の神とは異なるところである。かくして阿弥陀仏は修因感果の報身として、大慈悲をもって一切衆生を救済する人格身として描かれているのである。

四、むすび

① 仏身観を論じたところで阿弥陀仏は三身の中の報身であることを見たのであるが、さらに法然によれば、すべての仏には共通した内証の功德がある。即ち仏が仏であるためには三身を具備しなければならぬのである。「逆修説法」(四七日)には

ることについて法然の語るところを三つに分けて考察してみよう。

第一は「悲華經」所説の「無諍念王」の名を出しているものである。「三部經大意」には、

阿弥陀如来因位ノ時、無諍王ト申セシ時、菩提心ヲ発テ、生死ヲ過度セシメムト誓給ヒシニ、釈迦如来ハ宝海梵士ト申シキ。

(昭法全、四〇頁)

とあり、また「無量壽經釈」には

双卷經云、乃往過去久遠無量不可思議(無央數)劫、有_二仏出世_一、名_二錠光如来_一。次_二仏名_二光遠_一。乃至第五十三_二仏名_二處世如来_一。其次在_レ仏、名_二三世自在王如来_一。時有_二国王_一。離垢淨王歟、無諍念王歟、所詮_二一体同名也_一。聞_二仏所説_一、発_二無上道心_一、即弃_二金輪之位_一、行作_二沙門_一、辞_二万乗之機_一、求_二無上道_一、高才勇哲、與_レ世超異、号曰_二法藏_一。……(昭法全、六九頁)

とある。「無諍念王」は「悲華經」第二(正蔵三卷ノ一七四頁下)に見えるもので、「離垢淨王」は同じく「悲華經」の異訳とされている。「大乘悲分陀利經」(正蔵三卷ノ二四二頁上)に「離諍」として出ている。特に「無量壽經釈」の文について考察してみると、まず「乃往過去……時有_二国王_一」までは、多少の省略はあっても、「無量壽經」の文とほぼ同じである。しかし次の離垢淨王、無諍念王の名は見えない。ちなみに「無量壽經」の文をあげると、

時有_二国王_一、聞_二仏説法_一、心懷_二悦豫_一、尋_二発_二無上正眞道意_一、棄_レ国捐_レ王行作_二沙門_一、号曰_二法藏_一、高才勇哲、與_レ世超異……(浄全一ノ四頁)

となっている。さてこれを「選択集」所説の文と比較すると、「選択集」では「無量壽經」の文がそのまま引用されている(但し五十三仏の部分は縮小されている)。離垢淨王、無諍念王の名は見えない。このことから「選択集」撰述以前、東大寺三部經講説の頃には、「悲華經」所説の弥陀本生説話が法然の念頭にあったことが知られる。

第二は因位の修行の内容として六波羅密をあげている文である。

「無量壽經釈」(正徳版)では「依願修行」を明かして
依願修行者、発_二四十八願_一、後為_二成_二就此願_一、不可思議兆載永劫、積_二植菩薩無量行願_一、難行苦行積_レ劫累徳。或人云、其因行者多撰_二六度_一、六度者一檀、二戒、三忍、四進、五禪、六慧也。

(昭法全、七八頁)

とし、「逆修説法」(一七日)には、真身を明かす中で、

弥陀因位之時、於_二三世自在王仏所_一、発_二四十八願_一之後、兆載永劫之間、修_二布施持戒忍辱精進等之六度万行_一、而所_レ顯之修因感果之身也。(昭法全、二三三頁)

と示し、「天台宗の人との問答」の中には

弥陀因位の時、一切衆生に代りて、兆載永劫の間、六度万行、諸波羅密の一切の行を修して、其功徳を悉く六字の名号に納められたる間、万行万善諸波羅密、三世十方の諸仏の功徳の、六字の名号にもれたるはなし。(昭法全、七一九頁)

と説かれている。万善万行の根底に六波羅密のあることが指摘される。この六度は「選択集」には見えない。これは「選択集」が阿弥

名号を唱れば、定て往生すとの給へるは、決定にして疑無事也。一切衆生皆此事を信すへしと證誠し給へり。(昭法全、五九八頁)と示している。同趣の文は「御消息」にも見える。

先づ阿弥陀如来願を發して、云く、若し我れ仏に成りたらんに、十方の衆生我くに、生れんと願ひて、名号を唱る事、下十声一声に至らんに、わか願力に乗して、若し生れずんば正覺を取らしと誓ひ給て、その願成就して既に仏になり給へり。然を釈迦ほとけ、此世界に出て、衆生の為に、かの仏の本願を説き給へり。又六方に各の恒河沙数の諸仏ましくて、口々に舌を舒へて、三千世界に覆ふて、無虚妄の相を現して、釈迦仏の弥陀の本願を讀て、一切衆生を勧めて、彼仏の名号をとふれば、定て往生すと説き給へるは、決定して疑ひなき事也。(昭法全、五八二頁)

またつぎの二つの語録には、諸行の中より念仏一行を釈迦の付属の行とする(「選択集」第十二章所説)のに関連して三者の關係が示されている。

イマ釈迦ノオシエニシタカフテ往生ヲモトメルモノ、付属ノ念仏ヲ修シテ釈迦ノ御コ、ロニカナフヘシ。コレニツケテモ、マタヨク〳〵御念仏候テ、仏ノ本願ニカナヒタマフヘシ。マタ六方恒沙ノ諸仏ミシタヲノヘテ、三千大千世界ニオホヒテ、モハラタ、弥陀ノ名号ヲトナエテ往生ストイフハ、コレ真実ナリト證誠シタマフナリ。……………弥陀ノ本願釈迦ノ付属六方ノ護念一一ニムナシカラス。(「大胡の太郎実秀が妻室のもとへつかはす御返事」昭法全、五一

二頁)

マコトニ往生ノ行ハ、念仏カメテタキコトニテ候也。ソノユヘハ、念仏ハ弥陀ノ本願ノ行ナレハナリ。余ノ行ハ、ソレ真言止観ノタカキ行法ナリトイエトモ、弥陀ノ本願ニアラス。マタ念仏ハ釈迦ノ付属ノ行ナリ、余行ハマコトニ定散両門ノメテタキ行ナリトイエトモ、釈尊コレヲ付属シタマハス。マタ念仏ハ六方ノ諸仏ノ證誠ノ行也。余ノ行ハ、タトヒ顯密事理ノヤムコトナキ行也ト申セトモ、諸仏コレヲ證誠シタマハス。コノユヘニ、ヤウヤウノ行オホク候ヘトモ、往生ノミチニハ、ヒトエニ念仏スクレタルコトニテ候也。(「九条殿下の北政所へ進ずる御返事」昭法全、五三三頁)

「三心料簡および御法語」には五決定なるものがあげてある。一弥陀本願決定也。二釈迦所説決定也。三諸仏證誠決定也。四善導教釈決定也。五我等信心決定。以ニ此義ニ故往生決定也云々。

(昭法全、四五二頁)

これらの語録から三者の關係を見るに、阿弥陀仏は本願を成就した當の仏であり、釈迦はこの弥陀の本願(その中心は念仏)を現実の一切衆生に勸説し、六方の諸仏はこうした釈迦の教えの真实性を證誠しているのである。一切衆生の究極的救済、出離得脱を目的とする釈尊の教えは、阿弥陀仏の本願念仏に集約され、これを六方の諸仏が證誠しているのである。

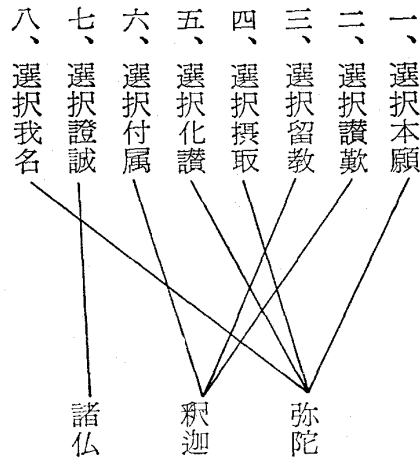
三、報身論

報身仏は修因感果の仏身である。阿弥陀仏が修因感果の仏身であ

本願、撰取、我名化讚此之四者、是弥陀撰取也。讚歎、留教、付
屬此之三者、是釈迦撰取也。證誠者六方恒沙諸仏之撰取也。

(昭法全、三四七頁)

と示している。これを図式するとつぎの如くなる。



この三者の関係はさらにいくつかの語録に明白に示されている。
まず「大胡の太郎実秀へつかはす御返事」では、深心(浄全二ノ五
六頁)について語る中で、たとい造罪の凡夫であっても、本願念仏
により往生決定すること疑いなきことを示し、その理由としてつぎ
の如く示している。

ソノユヘハ、阿弥陀仏イマタ仏ニナリタマハサリシ、ムカシモシ
ワレ仏ニ、ナリタラムニ、ワカ名号ヲトナフル事、十声一声マテ
セムモノ、ワカクニニムマレスハ、ワレ仏ニナラシト、チカヒタ
マヒタリシ、ソノ願ムナシカラスシテ、ステニ仏ニナリ。タマヘ

リ。シルヘシ、ソノ名号ヲトナエム人ハ、カナラス往生スヘシト
イフコトヲ。マタ釈迦仏コノ娑婆世界ニイテテ、一切衆生ノタメ
ニ、カノ阿弥陀仏ノ本願ヲトキ、念仏往生ヲススメタマヘリ、マ
タ六方ノ諸仏ハソノ説ヲ證誠シタマヘリ。(昭法全、五一七頁)

同趣の文が「正如房へつかはす御文」にも見える。

其ノユヘハ、阿弥陀仏ノイマタ仏ニナリタマハサリシムカシ、ハ
シメテ道心ヲオコシタマヒシ時、ワレ仏ニナリタラムニ、ワカ名
号ヲトナフルコト十声一声マテセムモノ、ワカクニニムマレス
ハ、ワレ仏ニナラシトチカヒタマヒタリシ、ソノ願ムナシカラ
ス、ステニ仏ニナリタマヘリ。マタ釈迦仏、コノ娑婆世界ニイテ
テ、一切衆生ノタメニ、カノ本願ヲトキ、念仏往生ヲススメタマ
ヘリ。マタ六方恒沙ノ諸仏、コノ念仏シテ一定往生スト、釈迦仏
ノトキタマヘルハ決定ナリ。モロモロノ衆生、一念モウタカフヘ
カラス。コトコトク一仏モ、ノコラス、アラユル諸仏、ミナコト
コトク證誠シタマヘリ。ステニ阿弥陀仏ハ願ニタテ、釈迦仏ソノ
願ヲトキ、六方ノ諸仏ソノ説ヲ證誠シタマヘルウエニ……

(昭法全、五四三頁)

また「浄土宗略抄」には、同じ深心について語る中で、

阿弥陀仏、浄土を儲けて、願を発して宣はく、十方衆生、我国に
生れんと樂ひて、我名号を唱へんもの、若生れずは正覚を取らし
と誓給へるを、釈迦仏此世界に出て、衆生の為に彼仏の願を説
給へり。六方恒沙の諸仏は舌相を三千世界に覆て、虚言せぬ相を
現して、釈迦仏の、弥陀の本願を讚て、一切衆生を勧て、彼仏の

釈迦能於ニ五濁惡時、惡世界、惡衆生、惡見、惡煩惱、惡邪無信盛時ニ指讚弥陀名号、勸勵、衆生称念必得ニ往生ニ即其証也。

(浄全二ノ五八頁。「選択集」第八章、昭法全、三三〇頁引用。)

釈迦讚ニ歎極樂種種莊嚴。(同右)

また「三部經大意」には少し変わった形で弥陀と釈迦の関係が説かれていて。

宝海梵士聞畢テ、我必穢惡ノ国土ニシテ正覺ヲ唱テ、惡業深重ニソ輪廻无際ナラム衆生等ニ此事ヲ示サム。(昭法全、四二頁)

ここに宝海梵士とあるのは悲華經所説の釈迦如来である。また「無量壽經釈」にはその大意を述べるところで、

釈迦、捨ニ無勝浄土ニ出ニ此穢土ニ事、本説ニ浄土之教勸進衆生ニ為レ令レ生ニ浄土。……(昭法全、六七頁)

と示されている。

われわれが阿弥陀仏を知るのは釈迦を通じてである。浄土教は阿弥陀仏を中心とした教えであるが、このことが即ち釈迦を無視することではないことが、先に考察して来たことから明らかであろう。とかく浄土教は阿弥陀教であって仏教即ち釈尊の教ではないという批判があるが、これは間違いである。浄土教は釈尊の悟りを通じて開顕された仏教である。

2 弥陀釈迦諸仏

弥陀と釈迦の関係については先に見てきたが、さらに法然の語録には、この二仏に加えて諸仏が並列して説かれていることがしばしばある。たとえば「黒田の聖人へつかはす御文」には、

阿弥陀仏ハ不取正覺ノ御コトハ(ヲ)成就シテ、現ニカノクニ(二)、マシマセハ、サタメテ命終ニハ来迎シタマハムスラム。釈尊ハ、ヨキカナヤ、ワカオシエニシタカヒテ、生死ヲハナレムト知見シタマハム。六方ノ諸仏ハ、ヨロコハシキカナ、ワレラカ證誠ヲ信シテ、不退ノ浄土ニ生セムト、ヨロコヒタマフラム。

(昭法全、五〇〇頁)

とあり、また「津戸の三郎へつかはす御返事」には、初めの方で「弥陀ノムカシ、チカヒタマヒシ本願モ、アマネク一切衆生ノタメ也。」(昭法全、五〇一頁)とし、終りのところで念仏によって往生浄土をねがふべきことを明かした後、

タトヒ千ノ仏、世ニイテテ、マノアタリ、オシエサセタマフトモ、コレハ釈迦弥陀ヨリハシメテ、恒沙ノ仏ノ證誠セサセタマフ事ナレハト、オホシメシテ、ココロサシヲ金剛ヨリモカタクシテ、コノタヒカナラス、阿弥陀ノ御マヘニマイリナムト、オホシメスヘク候也。(昭法全、五〇六頁)

とある。また「選択集」第十六章には八種選択をあげている。即ち選択本願、選択讚歎、選択留教、選択撰取、選択化讚、選択付属、選択證誠、選択我名である。そしてこれを三仏に配して、

とある。これらのことから「阿弥陀経」「無量寿経」は娑婆の教主
 釈尊が正覚を成ぜられ、その悟りを通じて、極楽の教主阿弥陀仏を
 お説きになったものであることが明らかとなる。「逆修説法」(三
 七日)には、浄土三部経は阿弥陀仏の勝れた功德を集約して釈尊が
 お説きになったものであるとつぎの如く記されている。

夫仏功德百千万劫之間、晝夜説、不可窮尽。因茲教主釈尊、
 奉_レ称_レ揚_レ此阿弥陀功德、取_レ要中之要、略説_レ此三部妙典。

(昭法全、二四五頁)

また同説法(五七日)では無量寿経は釈尊が末代の衆生のために、
 慈悲をもって残されたものであると指摘されている。即ち花嚴経、
 涅槃経、凡そ大小権実一切の諸経、乃至大日金剛等などの真言祕密
 の諸経は皆悉く滅したとき、ただこの無量寿経だけが留っているの
 は何故であろうか。これに対して、

釈尊以_レ慈悲_レ留_レ給事、定深意候覧。仏智実難_レ測矣。云_下但阿弥陀
 仏機縁 深_ニ于此界衆生_ニ坐故、釈迦大師留_レ於彼仏本願_ニ矣。

(昭法全、二六八頁)

と記されている。また「津戸三郎へつかはす御返事」には、釈尊が
 諸教をお説きになっているのは随他意であって、その随自意は弥陀
 本願念仏の教えを伝えんとするものであると示されている。

釈迦も世にいて給ふ心は、弥陀の本願を説かんとおほしめす御心
 にて候へとも、衆生の機縁人に随て説き給ふ日は、餘の種々の行
 もとき給ふは、これ随機の法なり、仏の自らの御心のそこには候
 はず。されは念仏は、弥陀にも利生の本願、釈迦にも出世の本懐

也。(昭法全、五七二頁)

かくの如く釈尊は阿弥陀仏の功德、本願念仏の教えを説かんがた
 めにこの世に出現された仏であると法然は理解された。そして万機
 普益の本願念仏という立場からは、弥陀の教えを説くのが釈尊の出
 世の本懐であるとさえいえるのである。

また弥陀と釈迦との関係はかの善導大師の「観経疏」(玄義分)
 の文によって語られることもある。

仰惟釈迦此方発遣、弥陀即彼国来迎、彼喚此遣、豈容_レ不_レ去也。

(浄全、二ノ二頁)

ここでは釈迦は娑婆の教主として衆生に極楽浄土の教えを説き、弥
 陀はかの国から来迎したまう仏として説かれている。「常に仰せら
 れける御詞」の中には

上人常言云、我鳥帽子キヌ法然房也。黒白不_レ知、童子如、是非
 不_レ知無智者也。只念仏往生仰信。釈迦念仏往生セヨト勸、弥陀
 念仏セヨ、来迎仰ラレタリ。此一事信、余事不_レ知。

(昭法全、四九二頁)

とある。また「観経疏」(散善義)所説の二河白道では、釈迦と弥
 陀との関係がつぎの如く説かれている。

仰蒙_ニ、釈迦発遣指_ニ向西方_ニ、又藉_ニ弥陀悲心招換_ニ、今信_ニ順_ニ二尊之
 意_ニ。(浄全、二ノ六〇頁)

この文は「選択集」第八章(昭法全、三三八頁)の他に、「三心料
 簡および御法語」(同、四四九頁)にも引用されている。この他に
 も散善義には釈迦が弥陀を讃歎している文が見える。

る。この点われわれが仏の存在を問うとき心に銘記しておかねばならぬところである。

つぎに二身説について考察してみよう。これは真身・化身の説で、阿弥陀仏の功德に関するものである。「逆修説法」(一七日)ではまず仏の功德には無量身があり、総しては一身、別しては二身、三身、四身、十身などがあるとし、続いて、

今且以_二真身化身之_二身_一、奉_レ讚_レ嘆_レ阿_レ陀_レ之_レ功德_一。分_二此_二真化二身_一、見_二于_二双卷經三輩文中_一。先真身者、真実之身也。弥陀因位之時、於_二世自在王仏所_一、発_二四十八願_一之後、兆載永劫之間、修_二布施持戒忍辱精進等之_二六度万行_一、而所_レ顯_レ之_レ修因感果之身也。……次化身者、無而歎有、云_レ化者、隨機応_レ時現_二身量_一、大小不同。

(昭法全、二二三頁)

と示している。真身とは無量寿経所説の修因感果の身であり、化身とは隨機応時の仏身である。(化身については、円光化仏、撰取不捨化仏、来迎引摂化仏の三つがあげられている。)

ところでこの二身説で注意される点は、まずこれが仏一般についての説ではなく、特に阿弥陀仏の功德について語るものであることと、第二には真身というのは修因感果の身であるということである。元来仏身についての二身説にはさまざまな説がある。¹⁾しかしこれらとも異なる。また修因感果の仏身に対して法然は真実身としてゐる。この修因感果の仏身は普通報身と呼ばれるものである。この報身をして真実身とする点は後に述べる如く重要な意味をもっている。

二、阿弥陀仏と諸仏

1 弥陀と釈迦

まず弥陀と釈迦との関係を見るに、釈迦は娑婆の教主、弥陀は極楽の教主とされ、釈迦は現実の歴史的世界に現われた仏であることが確認される。「阿弥陀経釈」では「仏説阿弥陀経」を釈するに当り、「仏」とは「娑婆之化主、三身万徳之釈尊」……阿弥陀者、極楽之化主、十方諸仏之所讚也。」(昭法全、一三三頁)とあり、続いて

今者世尊、讚_二弥陀引摂之大_一、説_二極楽境界之妙_一、教_二苦界衆生_一、感_二安樂勝果_一。故以_二仏名号_一、為_二経別号_一、撰_二所有之衆徳_一、帰_二能化一身_一、但云_二阿弥陀_一也。(昭法全、一三三頁)

と示している。また「無量寿経釈」でも同様「仏説無量寿経」を釈して「仏説」の仏とは、

乃是梵音、此翻為_レ覺、三覺円満、故以_レ名_レ仏、此指_二能説釈迦_一。即_二拳_一通号_一、以_レ顯_二別体_一。説者、口音陳唱名句為_レ体、無量寿者、所説仏名、梵阿弥陀、此訳云_二無量寿_一。(正徳版、六八頁。「観経釈」には「仏」についての詳しい説明はない。「無量寿者、是彼土教主弥陀如来正報之身也。」とある。同、九八頁。)

と示している。また「三部経釈」(常福寺本)には無量寿経の題目を釈して、

仏者娑婆教主、説者、如来口音、無量寿者極楽能化。

(昭法全、一五九頁)

法然上人の阿弥陀仏觀

服部正穩

宗教思想の基本構造は有限なるものと無限なるもの、人間的なるものと超人間的なるものとの関係にある。この超人間的なるものは宗教的伝統の違いによってその名を異にする。たとえばこれは聖なるもの、マナ、神秘的力、道、礼、人格神、非人格的力、真実、自己の面目など。法然上人（以下「法然」とする）にとつては阿弥陀仏がこうした超人間的な宗教的實在である。ここでは法然の阿弥陀仏觀をつぎの三つの観点から論究することにする。

一、仏身觀

二、阿弥陀仏と諸仏

1 弥陀と釈迦

2 弥陀釈迦諸仏

三、報身論

一、仏身觀

法然の仏身觀について、まず三身説がはっきり出ているのは、「無量壽經釈」と「逆修説法」である。

法身者、無始無終。離一切相、絶諸戲論、周円無際湛然常住。次報身者、報三方行因、所感得之万徳身也。……次応身者、

起大神通、變現十方、而隨機宜為説妙法、令諸衆生利益安樂、是則応同穢土始終、八相示現之身也。

〔無量壽經釈〕、昭法全、七八頁

先法身者、は無相甚深之理也。一切諸法畢竟空寂、即名法身。次報身者、非別物、解知彼無相之妙理、智恵名報身也。所知名法身、能知名報身也。此法報之功德、周遍法界、無不周遍菩薩二乘之上、乃至六趣四生之上矣。次応身者、為濟衆生、於無際限中、示際限、於無功用中、現功用給也。

〔逆修説法〕四七日、昭法全、二五五頁

法身とは無始無終無相の真如法性の理身仏であり、報身は六度万行成就した修因感果の仏身である。また応身は現世に具体的な姿を示現し直接衆生を濟度する仏身である。「無量壽經釈」によれば、阿弥陀仏は三身中報身であり、また「逆修説法」によれば法身と報身は「知」によって結ばれており、法身は「所知」、報身は「能知」とされている。そしてこれは共に法界に遍満している仏身であ